

卒業レポート（古典文学①）

担当 木下綾子

【ゼミの概要】

本ゼミでは、平安時代を代表する文学作品である『古今和歌集』と『源氏物語』について、それぞれ春学期と秋学期に1巻ずつ取り上げて解釈と観賞、考察を行なう。具体的には、まずは写本のくずし字を解読して、代表的な活字の本文との文字、表現の違いを確認し、それぞれどのように解釈できるのかを考える。次に、複数の注釈書を比較してなぜその解釈になったのか、違いはどうして生まれたのかを考える。そして、言葉の源泉や典拠を探ることで、中国の史書や文学作品をも含む先行作品、後世の作品とつながる表現の歴史や、その背景にある政治史、文化史との関連を捉えながら表現の特質、つまりは面白さを探る。これらの解釈に基づいて各自が問いを立て、それを資料で裏付けながら解き明し、ほかのゼミ生や教員に伝わるように論述することを課題とする。そして、互いに質疑応答を繰り返すことで思考と言葉を練り上げている。

このたび卒業する115J生は、2016年度春学期には『古今和歌集』「恋歌一」、秋学期には『源氏物語』「若紫」、2017年度には通年で『源氏物語』「葵」を輪読した。慣れない古典読解に四苦八苦しながらも、お互いが励まし合い、ほのほのとした雰囲気でも乗り切った。この2018年度は卒業論文・卒業レポートに取り組んだため、さすがにテーマに見合う明確な問いやその解き方に辿りつくまでに苦労したようであったが、毎週のゼミで互いに知恵を出し合い、褒め合うなかで、テキストを丹念に読み込む勇気や、自己と対話する活力を得て、各々が質の高い論文やレポートを書き上げた。

またそのかわら、校外・課外学習も活発であった。1年生の春休みにおける新部室棟和室の百人一首大会に始まり、2度の東京国立博物館の古典籍見学、神保町古書街ツアー（日本書房の協力による『解体新書』全冊や『狂歌百鬼夜狂』などの熟覧を含む）、印刷博物館（凸版印刷）の展示見学、同館印刷工房の協力による『源氏物語』「葵」の新全集本と河内本本文の活版印刷体験、「子ども大学あげお・いな・おけがわ」プログラム「本の世界を楽しもう2一昔の文字が読めるかな？ 百人一首解読！」に参加した小学生のくずし字解読やカード作成の補助、折々の食事会によって親睦を深めた。

付言しておく、115J生は私が本学に着任した2015年度に入学してきた学生たちである。のちにゼミ生となる学生の一部は、初年度の春学期に受け持った「日本文学概説」において乱暴にも感じるほど元気なグループに属していた。私も初めての聖学院、そして初めての専任職であったため、学生の雰囲気も対処の仕方も掴みかねて実はかなり悩んだりもしたが、6月中旬の学生会球技大会においてバスケットボールに熱中する姿を見て、課外活動で輝くタイプなのだと合点がいき、講義の冒頭でそのことを卒直に述べて褒めたところ、授業にも熱心に取り組んでくれるようになった。ほかのゼミ生はオムニバス講義の「日本文化概論」や秋学期の「日本文学史（上代・中古）」になってからの付き合いであったが、毎回、印象に残る瑞々しいコメントを寄せてくれたため、私からは講義、学生からはコメントという形でコミュニケーションと信頼関係を積み重ねていく感覚が支えとなった。ゼミ自体は当時の2年生を相手にすでに開講していたが、1年生の時点から講義で見えた学生たちと同じ卓を囲んで議論を交わし、その成長や伸び悩む姿、そしてまた悩みを乗り越え、こちらの予想を大きく超えて開花していく様子を常に目の当たりにできたことは望外の幸せであった。みな話をまっすぐに聴き、よく信頼を寄せてくれて、よく期待に応えてくれた。これからも素直さを忘れずに、それぞれの世界に大きく羽ばたいてほしい。

【テーマ一覧】

115J027	小濱 成司	古事記と日本書紀の共通点と相違点 —素戔鳴尊の昇天から追放まで
115J030	後藤 拓実	綾崎隼『蒼空時雨』の世界観から読むトラウマ —トラウマがキャラクターと物語にもたらす 影響とその風景
115J044	栃木恭太郎	若紫巻から見る贈答歌 —尼君の源氏に対する疑いの目
115J045	外塚 千奈	『源氏物語』の物の怪—夕顔巻における物の怪
115J066	PAN HONGKUO	紫の上—悲しい運命と愛情

【卒業論文講評】

115J032 斎藤みのり 髑髏考

本論文は、中国・春秋戦国時代における思想の特質を踏まえながら、髑髏における生死の描かれ方とその意義を考察した意欲作である。具体的には、『莊子』の髑髏は莊子の夢において、生者と死者それぞれの喜びを述べるための対話の相手として現れること、『列子』の髑髏は『莊子』と共通しつつも、生死の別ではなく循環や変化の理を示すことを指摘する。その上で、髑髏が死の象徴であり、現実では単なる頭骨、夢では意思を持った姿で登場することを明らかにした。今後はさらに正確な読解や、中国の前後の時代、および日本の各時代の漢文・和文資料をも視野に入れた表現史的な考察、そして思想面での掘り下げが必要であろう。しかし、難解な漢文資料に挑み、独自の問いを立てて解き明かした点、大いに評価したい。なお、当該学生は指導教員の濱田寛先生が特別研究期間に入ったため、秋学期から本ゼミの預かりとなった。戸惑うこともあったと思うが、口頭発表や草稿の提出を担当回すべてにおいて果たし、基礎能力の高さと胆力を示した。賛辞を贈りたい。